

## 大図們イニシアチブ(GTI)第6回北東アジア観光フォーラム

ERINA 経済交流部経済交流推進員  
蔡聖錫

2017年7月27日、中国吉林省延辺朝鮮族自治州琿春市において「大図們イニシアチブ(GTI)第6回北東アジア観光フォーラム」が開催された。

「GTI北東アジア観光フォーラム」は、2012年中国吉林省琿春市で第1回が開催されて以来、今回で6回目の開催となっ

た。フォーラム開催の背景をたどると、まず2012年に中国中央政府から、地域発展戦略「中国図們江地域(琿春)国際協力モデル区建設の支援に関する若干の意見」と、「中国東北地方が北東アジア地域に向けて開放する規画要綱」が発表された。「意見」では、中ロと中朝の経済

協力の推進が明記されており、特に国境観光が重点的な経済協力分野として挙げられた。また「要綱」では、中国と北東アジア諸国間の国境観光を積極的に展開すること、そして国境観光路線を開拓すること等が記載されたほか、さらに2020年までに東北地方における北東アジア諸国が

らの観光客数を年間1800万人にするという具体的な目標値まで示された。このような経緯もあり、吉林省政府は、同じく図們江国境地域の観光振興を目的とする大図們イニシアチブ(GTI)事務局と連携し、さらに国連世界観光機関(UNWTO)の協力を得て、フォーラムの開催に至った。

報道によれば、2014年に琿春市政府はGTI事務局に対して「琿春市を北東アジア観光フォーラムの永久開催地にする」という内容で提案を行い、その年のGTI観光部会(Tourism Board)で承認されて、現在のように毎年琿春市で開催されることとなったということである。

開幕式では琿春市の張吉峰市長、延辺朝鮮族自治州の朴学洙副州長、吉林省旅行発展委員会の陳守君副主任、中国国家旅行局企画財務司の蔡家成副司長、GTI事務局のTuguldur baajikhuu事務局長、UNWTOのVanessa Saturプロジェクトマネージャーが歓迎・来賓の挨拶を行った。中国国家旅行局、吉林省政府、延辺朝鮮族自治州政府、琿春市政府は、琿春市が中国・ロシア・北朝鮮の3カ国の国境を有することから、今後、国境観光(Border Tourism)を中心に、輸送業、金融業、製造業等の関連産業を育成していくという考えを示した。Tuguldur baajikhuu事務局長は、図們江地域の国境観光のポテンシャルは高いと評価し、また、GTIの地方協力委員会(GTI Local Cooperation Committee)の会議では、観光分野における多国家間協力が優先事項に認可されて以来、中央から地方への関心が年々増していると述べた。

フォーラムでは、3つのセッションが行われた。

セッション1の「世界経済統合による観光発展動向」では、まず、UNWTOのVanessa Saturプロジェクトマネージャーから、世界観光産業の情勢について紹介があった。Satur氏によれば、過去60年を振り返ると、観光産業は当初、先進国の富裕層しか体験できなかったが、今は発展途上国の市民も十分楽しめるようになり、特にアジアの観光者数は毎年増加し、欧米と肩を並べる観光産業の先進地域になりつつあるという。また、観光産業は経

済に対する貢献度が高く、輸送業、製造業、サービス業等を含む様々な産業に対して波及効果があり、雇用の創出も期待できると述べられた。図們江地域は、広大な自然環境を始め多様な文化、歴史、考古、宗教が交錯する魅力ある場所であり、今後、GTIとの連携を強化しながら、観光企画、観光資源のリサーチ、人材育成、PR等の様々な分野で協力することが表明された。続いて、モンゴル環境観光省のGansukh Dambyn大臣顧問が、モンゴルの観光産業の現状について発表を行った。ロシア沿海地方観光局観光開発部のNadezhda Udovenko部長は、「沿海地方-ロシア極東の観光ハブ-国境観光と観光モビリティ」をテーマに、ロシア沿海地方と図們江地域国境観光とのコラボレーションについて発表を行った。

セッション2の「環日本海地域の観光連携」では、吉林大学管理学院の李北偉教授が、北朝鮮核ミサイル、米韓軍事演習、THAADミサイル等様々な問題が勃発するなか、北東アジア各国は観光分野での連携を通じて緊張を緩和するべきだと主張した。特に、中国・ロシア・北朝鮮の3カ国に跨る「国境観光特区」を作ること提案し、3カ国による共同運営委員会を組織して共同で特区を運営・管理し、利益を共有する方法を提案した。中国海洋大学の竇博教授は、考古学の観点から、例えば渤海国→朝鮮半島→日本の交流、明清時代の中国杭州→北京→吉林→黒龍江(アムール川)→サハリン島までの「北東アジア海上シルクロード」等を列挙して、観光資源の開発における新たな方向性について紹介した。ウラジオストク海洋港のElena Flintuk副CEOからは、クルーズ船観光の重要性について、ウラジオストク国立経済大学国際観光誘致研究所のGalina Gomilevskaya氏からは東アジア観光における各国連携、環日本海や環オホーツク海のクルーズ船観光について、それぞれ発表が行われた。筆者からは、日本及び新潟のインバウンド観光における取り組み、現状、課題、ERINAが参加した北東アジア観光フォーラム(IFNAT)等について発表を行った。

セッション3の「観光商品・プロジェクトアイデアに関するプレゼンテーション」

では、モンゴル観光教育研究者協会のMunkhtumur Dashbelen理事が、内モンゴル自治区満洲里市から約50km離れたモンゴル・中国・ロシアの3カ国国境地点で観光リゾートを建設する計画を紹介した。Munkhtumur氏によれば、現在満洲里市を訪れる観光客は年間600万人に達しており、このリゾートができれば1回の旅で3カ国の文化を楽しむことができ、観光の目玉になる可能性があるという。ロシア沿海地方ハサン地区観光国際協力部のKorotkih Oleg部長は、ハサン地区の自然環境、海水浴場、野生動物等の観光資源について紹介し、図們江地域の国境観光ルートにハサン地区を取り入れることを提案した。ロシア沿海地方観光情報センターのDaria Gusevaセンター長は、沿海地方の観光施設、観光資源について紹介した。吉林省中国青年国际旅行社、延辺遼東国际旅行社、長春文化国际旅行社の3つの旅行会社の企業責任者からは、自社の観光ツアーについて紹介が行われた。

本フォーラムで評価したいところは、発表者のバランスの良さであった。中国、ロシア、モンゴルの産官学の代表者が集まって、図們江地域の観光産業の現状を紹介し、それぞれのアイデア、プロジェクト等を共有するのは効果的であろう。さらに、図們江地域に限らず、モンゴルの代表者はモンゴル・中国・ロシアの国境エリアについて発表を行い、ロシアの代表者はオホーツク海、さらに北極海までを視野に入れた発表を行った。

改善して欲しいところは、問題提起または課題に対する議論の時間が少なく、全体として報告会だけの印象を与えた点である。国境観光は多くの場合、一国の経済中心地から遠く離れた場所で行われるのが常で、言葉の問題、インフラの不備、ビザ問題、安全問題、サービス意識の差異等の様々な問題に直面する。ユーザー満足度を向上させる観点から、問題解決のための努力、経験、ノウハウ等を共有することで、フォーラムの質がいつそう上がることになる。

報道によれば、2016年に図們江地域の重要都市である琿春市を訪れた観光客数は253.8万人(前年比29.1%増)に

達した。また、近隣の延吉空港の利用客数は2016年に過去最多の145万人(同1.4%増)を記録し、中でも国際線の利用客数は66.5万人(同15%増)に上った。さらに最近になって、中国側がロシアに対して琿春からウラジオストクまでの高速鉄道を建設する提案を行ったことも報道されている。遠い先の話のように聞こえるかも知れないが、琿春地域の自信に満ちた心境が伺える。

